

京都大学	博士（文学）	氏名	Rudy TOET
論文題目	An Optimality-Theoretic Analysis of the Japanese Passive (日本語の受動態の最適性理論による分析)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>この論文は、与えられた意味を能動節で表現するか、それとも受動節で表現するかという話し手の選択のあり方を、有標性概念の導入によりモデル化して提示したものである。ここで「対応する」というのは、事象の参与者を表す名詞句が同一で、少なくとも一見しては同義に見えるという意味で用いており、「私は雨に降られた」のような間接受動節の成立は考察対象外とされている。ただし、一見して同義に見える能動節と直接受動節が、注意深く見ればやはり異なる意味合いを持つ場合は、その意味的相違の成立に関する仮説も提示されている。この論文は序論の第1章と結論の第5章を除き、以下に述べる三つの章から成る。</p> <p><u>第2章 -Ni- and -ni yotte-passives (ニ受動節とニヨッテ受動節)</u></p> <p>本章では、対応する能動節の主語に相当する名詞句が「に」で標示されるニ受動節と、「によって」で標示されるニヨッテ受動節について、それぞれの成立条件及び意味的特徴が詳細に比較されている。その狙いは、第3章で分析され第4章でモデル化される現象をあらかじめ明確にしておくこととことだけでない。120年にわたる先行研究を整理し、日本語の直観を持たない読者にとってもわかりやすい、簡潔な一般化を提供することも狙いの一つである。</p> <p>ニ受動節の成立条件に関しては以下の一般化[1]-[17]、ニヨッテ受動節の成立条件及びニ受動節とニヨッテ受動節の意味的相違に関しては一般化[18]-[23]が提示されている（詳細を一部省略する）。一般化[19]と[20]は同じデータを捉えるものとして提示されているが、どちらがデータをより正確に捉えたものであるかについては立場が採られていない。</p> <p>[1] ニ受動節の適格性は、主語の指示対象が非情物であるほど低くなる。</p> <p>[2] 非情物主語のニ受動節の適格性は、益岡隆志氏提唱の「潜在的受影者」が関与する解釈、すなわち節の表す事象から有情物が影響を受けるという含意を含む解釈が可能であるほど高くなる。</p> <p>[3] 非情物主語のニ受動節として解釈できるものの適格性は、「に」で標示されている位格、向格または奪格の名詞句を含む同一の真理条件の適格な短縮受動節(能動節の主語に相当する名詞句を含まない受動節)としての解釈も可能であるほど高くなる。</p> <p>[4] 非情物主語のニ受動節の適格性は、益岡隆志氏提唱の「属性叙述受動節」として</p>			

の解釈、すなわち主語の指示対象の有意な属性の含意を含む解釈またはそれが明示的に表されているという解釈が可能であるほど高くなる。

- [5] ニ受動節の適格性は、主語の指示対象をEdward L. Keenan氏の提唱する「独立存在性」を有するもの、すなわち節の表す事象と独立して存在しているものと見なすことが不可能であるほど低くなる。
- [6] 非情物主語のニ受動節の適格性は、漢語動詞が用いられていれば高くなる。
- [7] 非情物主語のニ受動節は、二名詞句の指示対象が非情物、非人間的または不定であるほど高くなる。
- [8] ニ受動節の適格性は、真理条件、項の数及び主語がすべて同一である能動節が存在すれば低くなる。
- [9] ニ受動節の適格性は、二名詞句の指示対象が節の真理条件と両立しない別の意味役割を持つ解釈も可能であるほど低くなる。
- [10] ニ受動節の適格性は、出来事よりもその出来事がもたらした主語の指示対象の結果状態が際立つほど低くなる。
- [11] 対応する能動節における主観的形容詞を直接目的語や間接目的語の指示対象についての表現として解釈することもできるのに対して、ニ受動節における主観的形容詞は話し手と主語の指示対象のどちらかについての表現としてしか解釈できない。
- [12] 文が二つのニ受動節を含み、一方のニ受動節の主語と他方のニ受動節の二名詞句の指示対象が同一で、一方のニ受動節の二名詞句と他方のニ受動節の主語の指示対象も同一であれば、その文の適格性は低くなる。
- [13] ニ受動節の適格性は、二名詞句よりも主語の指示性が低いほど低くなる。
- [14] ニ受動節の適格性は、三人称の主語が一人称または二人称の二名詞句と組み合わせられていれば、あるいは二人称の主語が一人称の二名詞句と組み合わせられていれば低くなる。
- [15] ニ受動節の適格性は、その主語が必然的に主語になる構造に埋め込められていれば高くなる。
- [16] ニ受動節の適格性は、二名詞句の指示対象よりも主語の指示対象が主題性が高いほど高くなる。
- [17] ニ名詞句の適格性は、二名詞句の指示対象よりも主語の指示対象のアニマシーが低いほど低くなる(一般化[1][7][8]の3つは、この一般化及び一般化[13]に還元できる)。
- [18] ニヨッテ受動節の適格性は、「によって」の意味が節の表す事象と両立しないほど低くなる。
- [19] (a) ニヨッテ受動節は、ニ受動節と比べて、「によって」の意味により、出来事よりもその出来事がもたらした結果状態及びニヨッテ句における名詞句の

指示対象がその結果状態の原因であることが際立つ。

(b) 受動節は、出来事よりもその出来事がもたらした結果状態及び最も近似する能動節の主語に相当する名詞句の指示対象がその結果状態の原因であることが際立つほど、動詞の表す事象における主語の指示対象の経験や立場についての含意を含む解釈の蓋然性が低くなる。

(c) 動詞の表す事象における主語の指示対象の経験や立場についての含意を含むものとして解釈されない節であるほど、その節はフォーマルな表現として感じられる。

[20] (a) ニヨッテ受動節は、ニ受動節と比べて、フォーマルな表現として感じられる。

(b) 受動節は、フォーマルな表現として感じられるものであればあるほど、動詞の表す事象における主語の指示対象の経験や立場についての含意を含む解釈の蓋然性が低くなる。

[21] 受動節の適格性は、漢語動詞が用いられていけば高くなる(これは一般化[6]の適用範囲を広げたものである)。

[22] 能動節及びニ受動節、ニヨッテ受動節はいずれも、数量詞主語が数量詞目的語や数量詞ニ名詞句、数量詞ニヨッテ句と共起する場合、曖昧性がなく、数量詞主語の方がこれらよりも作用域が広い。

[23] 能動節及びニ受動節、ニヨッテ受動節はいずれも、数量詞主語が、文を修飾する副詞句としても述語を修飾する副詞句としても解釈できる数量詞副詞句と共起する場合、数量詞主語の方が作用域が広いようにも、数量詞副詞句の方が作用域が広いようにも解釈可能である。

### 第3章 Markedness-based analysis (有標性による分析)

本章では、日本語において能動節と受動節のどちらが用いられるかが、所与の状況におけるそれぞれの相対的有標性によって決まるとする分析が提示されている。そして、その相対的有標性は複数の独立した要因に左右されると主張されている。

分析は、以下の有標性階層と仮説から構成されている。

有標性階層 (不等号記号の左が無標、右が有標)

- |                  |        |   |         |   |     |
|------------------|--------|---|---------|---|-----|
| (a) <u>有情性</u>   | 人間     | > | 非人間的有情物 | > | 非情物 |
| (b) <u>独立存在性</u> | 有独立存在性 | > | 無独立存在性  |   |     |
| (c) <u>人称</u>    | 一人称    | > | 二人称     | > | 三人称 |
| (d) <u>主題性</u>   | 高主題性   | > | 低主題性    |   |     |
| (e) <u>指示性</u>   | 高指示性   | > | 低指示性    |   |     |

- (f) 意味役割      動作主      >      非動作主  
 (g) 文法役割      主語      >      非主語

(A) 次の二つの事実により、同一の真理条件の能動節と比べて受動節が固有的に有標である。

(1) 有標性階層(f)においては動作主より非動作主が有標で、そして有標性階層(g)においては主語より非主語が有標である。したがって、

(i) 動作主主語より非動作主主語が有標で、非動作主非主語より動作主非主語が有標である(有標性の逆転)。そのため、

(ii) 同一の真理条件の能動節(動作主主語及び非動作主非主語を持つ)より受動節が有標な主語(非動作主主語)及び有標な非主語(動作主主語)を有する。

(2) 受動節は、同一の真理条件の能動節には現れない受動態標識-(*r*)*are*-が動詞語幹に付加される。

(B) (a) 所与の述語項構造の表現として同一の真理条件の能動節と受動節が存在すれば、そのうち無標な方が用いられる。

(b) 能動節の有標性が受動節固有の有標性を超える場合にのみ、同一の真理条件の能動節よりも受動節が無標であり得る。

(c) 以下の(1)(2)が合わせて受動節固有の有標性を超えれば、能動節の有標性が受動節固有の有標性を超え得る。

(1) 最も無標である主語の文法役割を動作主名詞句に割り当てることの有標性

(2) 比較的有標である非主語の文法役割を非動作主名詞句に割り当てることの有標性

(d) (A)(1)(i)にもかかわらず、最も無標である主語の文法役割を動作主名詞句に充てることは有標性階層(a-e)において動作主名詞句とその指示対象が有標であればあるほど有標であり、比較的有標である非主語の文法役割を非動作主名詞句に充てることは有標性階層(a-e)において非動作主名詞句とその指示対象が無標であるほど有標である(有標性逆転)。

(e) 話し手が非動作主に関連する含意、例えば

(1) その非動作主に関連する潜在的受影者が節の表す事象から影響を受けるといふ含意、あるいは

(2) その非動作主が何らかの属性を有するという含意を意図すれば、その非動作主の主題性が高くなり得る。そして、有標性階層(d)によると、非動作主の主題性が高くなればなるほど、非主語の文法役割を非動作主名詞句に割り当てることの有標性が高くなる。

- (C) (a) ニ受動節における、対応する能動節の主語に相当する二名詞句は項である。したがって、直接ニ受動節は対応する能動節と同一の述語項構造を表すことができる。
- (b) ニ受動節における、対応する能動節の主語に相当する二名詞句は、対応する能動節の主語が能動動詞から付与されるものと同じ意味役割を受動動詞から付与される。したがって、直接ニ受動節と対応する能動節の真理条件は同じである。
- (D) (a) ニヨッテ受動節のニヨッテ句は副詞句、つまり付加句である。したがって、直接ニヨッテ受動節は最も近似する能動節と同一の述語項構造を表すことができない。
- (b) ニヨッテ受動節のニヨッテ句における名詞句の指示対象は、「よる」という動詞から意味役割を付与される。したがって、直接ニヨッテ受動節と最も近似する能動節の真理条件は必ずしも同じではない。
- (c) ニヨッテ受動節のニヨッテ句は必ず、文を修飾する副詞句ではなく述語を修飾する副詞句として解釈される。
- (E) (a) 形式的に曖昧な節は、最も無標な解釈が最も好まれ、最も有標な解釈が最も好まれないように、どの解釈が好まれるかがそれぞれの相対的有標性によって決まる。
- (b) 形式的にニ受動節としても短縮受動節としても解釈できる節は、前者の解釈においては動作主非主語が現れているのに対して後者の解釈においてはそれが現れていないため、短縮受動節としての解釈と比べてニ受動節としての解釈が固有的に有標である。
- (c) ニ受動節において、形式的に対応する能動節の主語に相当するものとして解釈できる二名詞句が複数現れている場合は、それぞれの解釈の真理条件の相対的有標性がそれぞれの解釈の相対的有標性を左右する要因の一つである。
- (F) 形式的に曖昧な節の適格性は、話し手の意図した解釈を同定することが聞き手にとって困難であればあるほど低くなる。
- (G) 真理条件以外の意味を意図しなければ受動節よりも能動節が無標であるにもかかわらず話し手が受動節を用いた場合は、聞き手は
- (1) 主語の指示対象に関連する潜在的受影者が節の表す事象から影響を受けるとい  
う推意や
  - (2) 主語の指示対象が何らかの属性を有するという推意
- のような主語の指示対象に関連する推意を含む解釈に至り得る。話し手がこのような推意を意図したならば、話し手にとって主語の指示対象の主題性がそれによって高くなり、受動節の有標性が低くなっていたことが聞き手にも分かるためである。

(H) フォーマルな文脈等の有標な文脈では、非動作主主語、動作主非主語、そして受動態標識-(r)are-の動詞語幹への付加の有標性が低くなり、動作主主語と非動作主非主語の有標性が高くなる(有標性の逆転)。

仮説(A)と(B)(a)-(d)は一般化[5][8][10]-[18][22][23]を捉えたものである。ニ受動節とニヨッテ受動節の違いに関する仮説(C)(D)の結果として、仮説(B)(a)はニヨッテ受動節には当てはまらないということになる。仮説(E)(F)は一般化[3][9]を、仮説(B)(e)、(G)は一般化[2][4]を、そして仮説(H)は一般化[21]を捉えたものである。

#### 第4章 Optimality-Theoretic model (最適性理論によるモデル)

本章では、第3章で提示された分析に基づいて「最適性理論」(Optimality Theory; OT)によるモデルが提示されている。

まず、日本語において所与の意味の表現として能動節と受動節のどちらが用いられるかの選択がモデル化されている。所与の意味に対して最適な形式を選ぶという発話過程がモデル化されており、これは「OT統語論」の一例となっている。意味的述語項構造が入力とされ、能動節と受動節が出力候補とされている。主な制約としては、「調和的整列」という手順を有標性階層に適用して得られる、有標な文法役割付与パターンにペナルティを与える有標性制約が用いられている。なお、標準最適性理論では、制約が言語によって異なる順序を成し、順序において高い位置を占める制約と低い位置にある制約の間には厳格的な支配関係があるとされるが、日本語における能動節と受動節の間の選択における制約の相互作用を正確にモデル化するには、厳格支配の原理を受け入れず、制約のそれぞれに実数の加重値が付与されるとすべきであると主張されている。その結果として、厳密には、最適性理論の前身である「調和文法」(Harmonic Grammar)によるモデルとなっている。

次に、仮説(E)(F)に関連する例文、つまり形式的に曖昧な受動節の解釈過程がモデル化されている。所与の形式に対する最適な意味の選択がモデル化されており、これは「OT意味論」の一例となっている。発話過程で用いられる制約が解釈過程でも用いられるという立場が採られている。さらに、意味的内容の信じがたい解釈にペナルティを与える制約が採用されている。

最後に、解釈過程においては発話過程も参照され、発話過程においては解釈過程も参照されるという双方向性がモデルに加えられている。発話過程において話し手の意図する推意を入力の一部とし、解釈過程において創造的な解釈にペナルティを与える制約があるとするすることで、双方向性を用いて仮説(B)(e)と(G)をモデル化することができる」と述べられている。推意の発生という語用論的現象がモデル化されており、これは「OT語用論」の一例となっている。

(論文審査の結果の要旨)

世界の諸言語の受動態を観察したDavid M. PerlmutterとPaul M. Postalは、諸言語の受動態に広く共通するのは、本来主語になるはずの語が主語になっていないことだけだと述べている。このことは、受動態の性質は個別言語ごとに探求していかねばならない部分が多いということでもある。日本語の受動態の研究は、長い歴史を持ち、現代日本語の共通語にかぎっても、その件数は膨大なものになる。それらは時代や学派の違いによって、アプローチだけでなく、問題意識もさまざまである。だが、その中核に、「日本語の能動態と受動態の違いは何か？」という問い、そして「先生にほめられた」のように主体がニでマークされるニ受動と、「開会が議長によって宣言された」のように主体がニヨッテでマークされるニヨッテ受動の違いは何か？」という問いが位置していることは、誰しも認めることであろう。Rudy Toet氏の論文“An Optimality-Theoretic Analysis of the Japanese Passive”（日本語の受動態の最適性理論による分析）は、現代日本語の受動態研究における、この2つの中心的な問いに正面から挑んだものである。

第1章でこの論文の前提が紹介された後、第2章では、後者の問い、つまり「現代日本語のニ受動節とニヨッテ受動節の違い」が追究されている。ここでは、ニ受動節とニヨッテ受動節それぞれの自然さに関する、およそ120年にわたる主だった研究が、古い日本語や、日本語以外の言語で書かれたものも含めて取り上げられており、国語学、海外の研究者によるフィールド言語学、構造主義言語学、生成言語学、認知言語学、機能主義言語学、そして形式意味論などの枠組みを超えて吟味され、日本語の直観を持たない海外の研究者にも理解できるよう、丹念にまとめられている。

この章の中心的な結論は2点、すなわち、ニ受動節の自然さが、アニメシー、受影、属性付与、他動性、結果、主題、人称、その他の事情によって上下すること、そして、西洋語との接触を契機として生じたニヨッテ受動節において、ニヨッテが、状態変化の原因のマーカールになっていることである。だが、言語事実がよく押さえられているために、それ以外にも、啓発的な部分が少なくない。一例を挙げれば、「障子が太郎に開けられた」は不自然だが「障子が何者かに開けられた」は不自然さが緩和されること、「この穴は太郎に掘られた」は不自然だが「無数の穴が蟻の大群に、次から次へと掘られていった」は不自然さが緩和されることなどを根拠に、著者のToet氏はニ受動節の自然さに主体のアニメシー、定性、指示性が関与するとし、このアニメシー、定性、指示性がまとまりを持つとしている。これは、アニメシーには人称や名詞類という形で「リアルさ」が絡みがちだというWilliam Croftの通言語的な観察と符合しており、この通言語的傾向が現代日本語にとっても無縁なものではないことを照らし出している。日本語の受動態を研究しようとする者にとっては、この章だけでも、一読の価値はあると考えられる。

第2章を踏まえて第3章では、第1の問い、つまり「日本語の能動態と受動態の違い」が追究されている。ここでも、相対的有標性というToet氏の選んだ慎重な観点が

良い記述を生んでいる。より具体的に言えば、膨大な先行研究の中には、やや短絡的な言語記述が見られることもある。「太郎の奥さんが太郎に殴られた」のような受動節を一律に不自然とするものがその例だが、この記述に反して「太郎の奥さんは武術の達人だ。いくら太郎が酔っぱらって暴れるとしても、太郎の奥さんが太郎に殴られるはずはない」などの自然な表現を考えることは困難ではない。だが、Toet氏はそれらの記述にも相応の価値を認めて、絶対的な規則ではない緩やかな制約として留めおき、さまざまな受動態表現の自然さを、諸制約間のバランスという形で捉えようとしている。「能動節と比べて受動節は表現形式が有標であるため、意味も有標なものになりがち」というアイコニックな仮説と共に提出された、氏の「有標性の階層」、そして、これを制約の形に捉えなおした「有標性の制約」は、言語で表現される事象と表現形式の結びつきについて、どのようなものがありがちで、どのようなものがそうでないかを表したもので、この論文の大きな成果と言えるものである。

さらに第4章では、以上の考察に基づき、話し手が構文を選択する過程に関して、最適性理論(Optimality Theory)によるモデルが提示されている。そこでは、さまざまな受動節がその節の特徴に応じて自然あるいは不自然になることが、それぞれの制約によるものと位置づけられた上で、能動態・受動態の選択が、重みづけられた制約の間の最適なバランスの問題として把握可能であることが論じられている。なお、文脈に対する考慮もなされており、フォーマルな文脈の下での有標・無標の逆転現象が「フォーマルな文脈では有標の表現がなされがち」というTalmy Givónの観察を援用する形で説明されている。

末尾の第5章で述べられている「残された課題」の中には、受動節の派生プロセスに関する、自説と先行研究との妥当性の比較が挙げられている。Toet氏が元来コミットしていたのは、この理論的な問題であったが、理論面での自説の優位を説得的な形で示すには根拠が十分でないという客観的な認識に立ち、この論文ではこの問題を一旦保留し、受動態の観察を徹底させた。この措置が大きな進展を生んだと考えられる。

特にモデル化を検討した第4章では、理論先行の姿勢を払拭しきれていないように、改善すべき点はなお残っている。二受動節と比べて二ヨツテ受動節の記述が大きく不足している点に加えて、「パーティに呼ばれた」と「パーティに呼んでもらった」のような、受動構文と「～してもらおう」構文との選択が考察に含まれていない点も問題であろう。だがこれらは、この論文の根本的な瑕疵と言うよりも、むしろToet氏の今後のさらなる発展を期待させるものと言える。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2020年1月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。